

## 金太郎飴への別離

昨今、我が国では教育論議が盛んであるが、最近、これに関係する二つのショッキングな話に遭遇した。

一つは家内のフランス人の友人が、日本人であるご主人の勤務の関係で東京から上海に引っ越したのであるが、11歳を頭に4人の子供さんがおられ、上3人は日本の普通の小学校に通っており、学校等子供の教育の関係でさぞかし悩ましい思いを引きずっていったのではないかと思いきや、“今の日本の教育では子供はまともには育ちにくい”として、<sup>きん きじやく</sup>欣喜雀躍として上海に引っ越していったのである。

第二がデンマーク人の友人が先般来日した折、日本での留学の思い出を語ってくれたのであるが、日本にきてはじめて“暗記する”ということを経験したそうである。デンマークでは意識的に暗記するという努力そのものが存在せず、学校の授業の力点はいかに他人と違った発想、意見を持ち得るかということであり、とにもかくにも他人と同じことを言うことは評価されない、徹底して違った意見をぶつけ合っただけの授業が多いというのである。

ところで筆者は仕事やプライベートで年に数回は海外に足を運ぶが、一般市民、特に子供たちの写真を撮るのが楽しみではあるものの、日本の子供たちにファインダーを向けることはめったにない。残念ながら子供らしく、くったくがなく目がキラキラと輝いている子供を見かけることは稀で、大人の顔つきをした子供が多くなってしまっているのである。すべてが教育のせいというわけではないし、日本には日本らしい教育というものがあってしかるべきであるが、ゆとり教育や飛び級制度の拡充が教育改革のポイントをヒットした措置であるとはとても思えないのである。また、活気にあふれた大人が少ないことも痛感させられるのである。

話は飛ぶが、一昨年、ニューヨークで当地駐在のN氏と食事しながらの議論が、アメリカ成長のカギはどこにあるか、に発展した。N氏は多様な人材を活かして課題達成にむけてチャレンジしていくのがマネージャーの役割であり、そのマネージャー自身が厳しい評価を受けるシステムが存在していることをあげたのであった。こうしたシステムが存在しない国から優秀な人材がアメリカに集まり、アメリカはさらに成長を続けるというのである。

こうした一連の話をつうじて、いじめ等で混乱する教育現場と構造不況を続ける企業組織の根っ子には、まずは画一化、横並び主義という病に冒された教師、マネージャーの存在があるように思う。子供も大人も一人一人が違った個性をもち、その人間らしく生きているときに一番エネルギーが発揮され、成長する、もっとも重要なことは体で経験し、自力で生きていく力を身につけていくべきことが、現代社会のリーダーの頭から抜け落ちているといわざるを得ない。

我が国農業は自然条件等を活かした適地適作、多品種少量生産の多様性に富んだ農業が本来であり、単一作物大量生産、大規模・近代化農業のアメリカ農業への追随からの転換が、今、求められている。農業にも共通する問題の根は深く、現下の最重要課題は横並び主義という呪縛からの脱却であり、そのためには“思い”を取り戻していくことが前提になると考える。